

投句欄 自由律の泉 ⑫

- 1 実像がカシヤツ 反射鏡の向こう側 檜 幽可
- 2 雨音過ぎて耳にしみる虫の音 アカホリ フキ
- 3 折れた歯戻す暑い顔 野谷 真治
- 4 自由律俳句はナウい秋の雲 行方ほいさっさ
- 5 押さねば開かぬ扉だ 押せばひらく 久光 良一
- 6 水音すずかぜ両手を空に広げる 大岳 次郎
- 7 大きな夕焼けの一日だった 金澤ひろあき
- 8 真つ暗な夜に花火を打つな 無 一
- 9 覚悟の外出涼し 木村 浩
- 10 心ないやりとりが聞こえる足の裏 植田 博
- 11 妻の遺服を畳む闇迫る軒下葎草の花揺れる 小山 栄康

- 12 水拭きした空に今日も誰かが虹を描いた 明日原夏斗
- 13 挨拶をする相手もなし 大出 匡
- 14 「どうでも」を塗りつぶしい人である 佐川 智英実
- 15 やり残したこと増え冬につまずく 原 さつき
- 16 コーヒーの香の朝に居る 田中 美太
- 17 ひらり落葉が風に身をまかす夕焼け 富永 鳩山
- 18 彼岸花の後ろは青空墓参りの帰り道 ちば つゆこ
- 19 深くありたいですねでも燃え尽きなさるな 田辺 まさゆき
- 20 忘れ物忘れて笑うしかない 白松 いちろう
- 21 悲しみの水分過多で低く漂う 富永 順子
- 22 菜園で腰に手を当て水分補給 和寄 はると
- 23 仲見世は疎ら秋空ひろすぎる さいとう こう

- 24 ダイジョウブツキガミテイテクレル 大迫 秀雪
- 25 墓参りできず彼岸花の花糸のちぢれ 佐瀬 風井梧
- 26 もしもあのときが反芻する夜長 室伏 満晴
- 27 コロナの闇人の闇をも包み込む 中島 雲舟
- 28 消せない記憶と闘う眠れぬ暗闇 部屋 慈音
- 29 約束は百年後ですキリコの街のかたつむり 井尾 良子
- 30 そのままでいいよと風の温情 黒瀬 文子
- 31 ブロック塀のすみっこからコスモスが咲く 平岡 久美子
- 32 この路を曲がらずに行く秋の月 藤沢 雅幸
- 33 洗濯物強くはらって襟をたてる 荻島 架人
- 34 空見上げもみじ葉のかるたとり 柳泉 洞

● 泉⑪より 一句鑑賞

こらえている空の下を急ぐ

富永 順子

▼非日常の中、こらえることの多い今、空も必死で耐えているのか？ 空の下を急ぐとはどのような意図だろう。負のエネルギーに反発するかのよう、ひたすら前向きに歩もうという意気込みを感じました。

(原 さつき)

▼こらえているのは空なのか、急いでいる人なのか、いずれにしても、今にも降り出しそうな空の下を急いでいる人の、せつぱつまった気持ち伝わってくる句です。

(久光 良一)

▼無駄がありません、かといって、張りつめてばかりではありません。「こらえている」という言葉が、きちんと平仮名となって、ゆとりをかもし出しています。こんなすばらしい句は、後世に残さないといけません。

(大岳 次郎)

▼雨催いを「こらえている空」と表現することで、より空の陰しさが強調されて描写されており、緊張感のある句になっています。

(室伏 満晴)

土を掘ろう花を植えよう未来を信じよう 久光 良一

▼なんと素直で力強い句でしょう。生き生きとしたリズムも感じます。久光氏のなかには、世界への懐疑と肯定感が同居しているのですね。

(田辺 まさゆき)

▼国内も国外も重苦しいニュースが多い昨今。そうではあっても世の中は緩やかに改善していくはずと信じたい。一人一人は微力

でもそうしたことに役立ちたいし、子どもたちにもつなげていきたい。
(大出匡)

春風に花の会話がながれている

ちば つゆこ

▼コロナ禍で例年になく人はまばらだったが、若者・家族連れが河川敷で花見をやっていた。まさに「春風に花の会話」がはずんでいた。なんとも平和で微笑ましい風景を橋の上から眺めていました。
(和寄 はると)

▼花の会話が、風に乗って聞こえたのだろうか。イメージが優しい。コロナ禍、花達の会話の内容が知りたくなった。
(野谷 真治)

草の枝垂れて墓らしい墓だ

柳泉洞

▼草が生い茂るわけでもなく、供えた花が枯れて棒みたいになっているわけでもない。ちようどいい様子。それはもう、奇跡なのかもしれない。
(佐川 智英実)

▼ピカピカの墓は苦手である。むしろ苔むして草に覆われてしまっているほうが、墓らしいと思ってしまう自分がいる。死者はゆるやかに忘れられてゆくべきなのではないか？ このままでは世界はやがて墓に覆われてしまうだろう。墓らしい墓に、何となく共感してしまった。
(大迫 秀雪)

遠い日常減らない口紅

井尾 良子

▼華やかな気分で毎日使っていた口紅、そんな日々も遠く過ぎて、時に来るメランコリーに消えることのない女心が見える。

(部屋 慈音)

▼コロナ感染の拡大で、これまでの日常が取り戻せなくなりまし

た。「減らない口紅」がその閉塞感をあらわしています。いつになれば元の日常に戻れるのか、焦燥を覚えるこの頃です。
(明日原 夏斗)

咳をしたらジロリ

岩崎 直樹

▼私も挑戦はしましたが、諦めました。やはりできる人はできるんだなあ。私は好きです、こういう感じと手法の句。たんなるパロディではない軽みと風刺が効いています。これぞ俳諧というべきでしょう。
(行方 はいさつき)

▼つい惹かれる面白みがある。元句の孤独を踏まえると、自らが置かれた境遇の居心地の悪さを感じるが、それでいてまた孤独の種類が違う。こちらは四面楚歌の孤独であり、人がいるが故の孤独である。目のある孤独だ。
(柳泉洞)

潮風に誘かれて出刃を研ぐ

植田 博

▼「潮風に誘かれて」と、おそらく「釣り日和ですよ」とか、「今日は大漁ですよ」とでも言われたのかも。「大漁」を信じて、作者は出刃包丁を研ぎ始めました。「今日は美味い刺身で一杯いけそう」と云う「捕らぬ狸の皮算用」の一句。残念だったけど、巧い一句。
(檜 幽可)

▼普段ではない誘い。潮風は人の向くもの憩うもの。出刃研ぐ緊迫感も浜に持ち来た杯の待つ卓への楽しみ。食する前の静かな営み。木香の序章。
(藤沢 雅幸)

チンドン屋さんのクラリネットが春を呼ぶ

平岡 久美子

▼コロナで自粛の中、日本も世界も元気がない。そんな時、街中で久しぶりに聞いたチンドン屋さんの太鼓やクラリネット！一

気に春が来たと感じた作者に共鳴しました。(ちば つゆこ)
▼楽しそうな春の風景が想像でき、クラリネットの音色が聞こえてきそうです。(アカホリフキ)

西日窓さがしものが見つかからない 原さつき

▼大事な何かをさがしていて、中々見つからない苛立ちが「西日窓」という言葉に上手くフィットしていて、素晴らしい効果を出していると思います。もしかしたら、現実の世界ではなく夢の中の出来事かも知れません。(中島雲舟)

米粒にのこる田植えの腰の角度 室伏満晴

▼同じ物でも、自身が作ったもの、育てたものには思いがこもる。筆者は多分米作りをされている人ではなからうか。米粒から、自身が田植えをした腰の角度が、身の内から思い出されるのだ。体にしみついた記憶は重い。(金澤ひろあき)

服一枚脱いでさあ明日からのこと 黒瀬文子

▼読んでいて、気持ちが何故か明るくなってきました。「そうなんだよな！」って思いました。(田中美太)

視線の甘すっぱさ 遠い日の心拍 部屋慈音

▼恋愛の句！ いいじゃないですか。(無 一)

陶土に指跡が生きている 十年 白松いちろう

▼「海紅」で句作していた叔父吉川金次が生前私たちに言っていたのは、軽妙・技巧・印象だけで詠んではいけない、句は重厚に太く、そして内面を深めるのだと。白松いちろう氏のこの句を読む

んだとき叔父の言葉が甦ってきました。(小山榮康)

形相に蠅が震える 檜幽可

▼小さなハエも大きなハエも取ろうとするとなかなか取れない、暑い中ハエ叩きを持って構えている作者の姿をハエが見たらどうでしょう、きつと凄いい形相でしょう。思わず震えて勝手に落ちてしまったのかも。(井尾良子)

シャボン玉ひとつふたつと嘘がとどろく 中島雲舟

▼シャボン玉が青い空へ七色の虹となつてはじける。作者はシャボン玉の中に嘘が詰まっていると、だけどその嘘はシャボン玉と一緒に消えるのでは？ 楽しい妄想に遊びました。(平岡久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

〈締め切り〉 2021年11月30日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にはチェック欄があります)。